

色、もしは蘇芳なき五重にて、襲ぎもはみな綾なり。

(紫式部日記上)

ゆゑに

【七一三】

日本武尊は皇子なり。その尾張の國に留り給ひし日、劍を桑樹に懸けて厠に上られたる事史に明なり。降りて徳川氏の始に墮りても、將軍秀忠夜厠に上りて、刺客の麥隴中より來り窺ふを見きこいへば、その状も知られなん。然れどもわが國古より、矢を以て田に糞ふ故に、家さして厠竇の設なきはなし。たゞ飲食衾褥の不便にいたりては、全く支那に異らざしなり。管に異らざりしのみにあらず、甚しきに至りては、旅店だにあることなかりき。これその往時、旅を以て草枕を稱せし所以なり。古歌にいはずや、

家にあれば筒にもるいひをくさ枕

たびにしあれば椎の葉にもる

こ。飲食もまたこれに準ず。故に軍防令には兵士をして人毎に糶六斗を儲

へしむこいひ、伊勢物語には涙を糶の上に落すこいひ、太平記には儲進じこいへり。皆これ支那の「適三千里」者、三月聚糶、「こいふ」その趣を同じくせり。

(那河通高)

第九類 感動詞篇

三九八

あな

【七一四】 あなあやし、あなあやし。門毎に黒き布もて飾れる弔旗は掲げられぬ。人毎に喪章といふ黒きさいでは著けられぬ。見る目の前に、天の下常闇なして、行き逢ふ人、男も女も、老いたるも若きも、皆夏草の萎むらぶれぬ。こはまごに神去り給ひしなるか。

〔明治聖天子〕所載 八尺のなげきより、金子元臣稿

【七一五】

「天の日にかまれる雲はくにたみがななく息嘯の風に晴れなむ」も頼もしく心強く思はれて、鳥居の前より公園の東なる電車道に出づる折しも、南より見馴れぬ馬車の來るに逢ひぬ。よく見れば棺を乗すべき車の空しきなり。あなご心に思まはしく憎くおほほしが、後にぞいみじき事のしらせご思ひ合せられし。

〔明治聖天子〕所載 八尺のなげきより、阪正臣稿

あはや

【七一六】 同じき三月四日關東より飛脚到來して、軍を止めて徒に日を送るごに然るべからずご下知せられければ、宗徒の大將たち評定ありて、御方の陣ご敵の城ごの間に、高く切り立てたる堀に橋を渡して、城へ打入らむご巧まれける。これが爲に京都より番匠を五百餘人召し下し、五六八九寸の材木を集めて、廣さ一丈五尺長さ二十丈餘に梯を作らせける。梯既に作り出しければ、大綱二三千筋つけて、車を以て巻き立て、城の切崖の上へぞ倒しかけたりける。魯般か雪梯もかくやご覺て巧なり、やがてはやりをの兵五六千人、梯の上を渡り、我先にご進みたり。あはや此城只今打落されぬご見わたる所に、楠かねて用意やしたりけむ、投松明のさきに火をつけて、梯の上に薪を積めるが如くに投げ集めて、水彈を以て油を瀧の流るゝやうにかけたる間、火橋梯に燃わつきて溪風炎を吹きしきたり。

三九九

(太平記、卷七 千劔破城軍)

あはれ

【七二七】 道にたづさはる人、あらぬ道のむしろに臨みて 「あはれわが道ならましかば、かくよそに見侍らじものを。」 さいひ、心にも思へるこゝ常のいさなれど、よにわるくおほゆるなり。知らぬ道のうらやましくおほれば、「あなうらやまし、なきか習はざりけむ。」 さいひてありなむ。

(徒然草一六七段)

【七二八】 赤坂の大將金澤右馬助 大佛奥州に向ひて宣ひけるは、是程わづかなる山の巔に、用水あるべしとも覺ゆ候はらず、又あけ水なんごをよその山よりかくべき便も候はぬに、城中に水澤山にありけに見ゆるは、如何さま東の山の麓に流れたる溪水を夜な夜な汲むかきおほわて候 あはれ宗徒の人々一兩人に仰せつけられて 此の水を汲ませぬやうに御計ひ候へかしと申されければ 此の義然るべしとて名越越前守を大將ぞして 其の勢三

千餘騎を指し分ちて、水のほごりに陣を取らせ、城より人下りぬべき道々に逆木を引きてぞ待ちかけゝる。
(太平記、卷七、千劔破城軍)

いさ

【七一九】 初瀬にまうづる毎に宿りける人の家に、久しく宿らで、程へて至れりければ、かの家のあるじ、「かくさだかに宿はある。」 さいひ出して侍りければ、そこにたてりける梅の花を折りてよめる。

人はいさ心もしらす故郷は

花ぞむかしの香に、ほひける。

(古今集、紀貫之)

【七二〇】 亭に名づくるに千竿を以てする、君嫌ふこゝ勿れ。竹は古人のまじりふに愛して、友に今更古めかしきも、物は年々に古りゆき、姿は日々に新しからんに、まして蕪門の風雅にいはい、句はこの君の空心に求むべく、てにはは節々の程よからんをそふ。不易は時雨の色もかはらず 流行は折々の風になびきて、爰に東坡も七賢もいさ知らぬ趣りさいふべし。身は

よし劔冠の仕途にかきて理屈の塵に交はるこも、纔に半日の閑を得る時はこれを五湖の舟棹もななめ、富春の釣竿もなし、ある日は竹馬の稚心に戯れ、鳩の杖の老をまねびて、俳諧自在の遊を知れるより千竿の名の空しからずば、よもつきじく、萬代までの竹の宿りこ、名にかふ鳥も此枝をたのみてゆかしき軒端なるべし。猶思ふに、此亭の朝風さやぐ春もあるべく、雪にをかしき夕もあるべけれき、我は只郭公の告るを待ちて、筍のさかりをこそ訪ふべけれき、戯れて筆をこゝめぬ。(鶴衣、千竿亭記)

いざ

【七二二】 猶ゆきくてもざしの國き、しもつふさの國きの中に、いざ大なる河あり、それをすみだ川といふ。その河のほとりにむれるて思ひやれば、かきりなくもほくも來にけるかなき、わびあへるに、わたし守けや船にのれ、日もくれなんといふに、のりてわたらんきす。みな人もわびしくて、京にかもふ人なきにしもあらず。さるをりしも、しろき鳥のはしきあしき

赤き、鳴の大きなる、水の上にあそびつゝ、いををくふ。京には見ぬ鳥なれば、みな人見しらす。わたし守に問ひければ、これなん都鳥といふをききて、

名にしかはばいざここ、はん都鳥

わがかもふ人はありやなしやこ

こよめりければ、船こぞりてなきにけり。

(伊勢物語)

いざや

【七二三】 歌の道のみ、古にかはら、なき、いふここもあれき、いざや、今もよみあへる、同じここば、歌枕も、昔の人のよめるは、更に、同じものにあらず。やすく、すなほにして、姿も清けに、あはれも深く見ゆ。梁塵秘抄の御曲のここばこそ、又、あはれなるここは、多かめれ。昔の人は、いかにいひ棄てたるここぐさも、みな、いみじく聞ゆるにや。

(徒然草一五段)

【七二三】 大進生昌が家に、宮の出てさせ給ふに、ひんがしのかぎは よつ足になして、それより御輿は入らせ給ふ。北の門より女房の車も陣屋のるねば入りなむやと思ひて、頭つきわろき人もいたくもつくろはず、よせておるべき者と思ひあなづりたるに、びらうけの車なごは 門小さければ、さはりてぬいらねば、例の薙道しきて下るゝに、いさ憎く腹だたしけれごいかがはせむ。殿上人、地下なるも、陣に立ちそひ見るもねたし。おまへにまゐりてありつるやう啓すれば、こゝにも人は見るまじくやは。なごかは、さしも打さけつるご笑はせ給ふ。されごそは皆めなれてはべれば、よくしたてゝ侍らむにしこそ、おごろく人もはべらめ。さてちかばかりなる家に、車いらぬかごやはあらむ。見ねば笑はむなごいふほごにしも、これまゐらせむきて、御視なごさし入る。いでいさわろくこそおはしけれ。なごてか其のかぎせくば造りて住み給ひけるぞごいへば、笑ひて家のほご、身

のほごに合はせて侍るなりごいらふ。されごかぎのかぎりを高く造りける人もきこゆるはごいへば、あなおそろしご驚きて、それは干定國か事にて侍るなれ。ふるき進士なごに侍らすば、うけたまはり知るべくも侍らざりけり。たま〜この道にまかり入りにければ、かうだにわきまへられ侍るごいふ。その御道もかしこからごむめり。ねんだうしきたれば、皆おち入りて、さわぎつるはごいへば、雨のふり侍れば、けにさも侍らむ。よし〜またおほせかくべき事もぞ侍る。まかり立ちなむごて去ぬ。何事ぞ、生昌がいみじうおぢつるはご、問はせ給ふ。あらず、車の入らざりつるごいひ侍りつるご申しておりぬ。

(枕草紙、四段)

【七二四】 大將の下知に随ひて軍勢皆軍を止めければ、慰む方やなかりけむ、或は碁双六を打ちて日を過し、或は百服茶、褒貶の歌合なんごを翫びて夜を明す。是にこそ城中の兵は中々悩まされたる心地して、心をやる方もなかりける。少し程経て後、正成いでさらば、又寄手をたばかりて居睡覺させむきて 芥を以て人長に人形を二三十作りて、甲冑をきせ兵仗を持たせ

て夜中に城の麓に立て置き、前に疊楯をつき並べ、其の後にすぐりたる兵
五百人を交へて、夜のほのくゞみ明けける霧の下より、同時に関をぎつこ
つくる。四方の寄手関の聲を聞き、すはや城の中より打出でたるは、是
れこそ敵の運の盡くる所の死狂ひよきて、我先にこそぞ攻め合ひける。

(太平記、卷七、千劍破城軍)

【七二五】 あり馬山るなのさゝ原風吹けば

いでそよ人を忘れやはする。

(後拾遺集、十三)

いてや

【七二六】 いでや櫻言はでしも 花さだにいへば異木には紛れぬものを、ほ
のくゞみ明け行く山ぎは、雲か雪かさばかり咲き満ちたるも、霞こめたる
ゆふまぐれ、花のけはひも臙に見えて、ここにのみ暮れ残す景色なごいふ
は浅かりけり。まいてうてなの伸びやかなれば近劣するなごいふは、かの
こゝかへて才おふ心に言ふ事なりかし。

(花月草紙、花)

【七二七】

いでや、この世に生れては、願はしかるべきこゝこそ多かめれ。み
かきの御位はいきもかしこし、竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞや
んごみなき。一の人の御ありさまは更なり、たゞ人も舍人なごたまはるき
は、ゆゝし見ゆ。その子うまごまでは、はふれになれご、なほなまめ
かし。それより下つ方は、程につけつゝ、時にあひ、したり顔なるも、み
づからはいみじき思ふらめご、さみくちをし。

(徒然草二段)

か

【七二八】 浅みぎり糸よりかけてしら露を

玉にもぬける春の柳か。

(古今和歌集、春、上)

かし

【七二九】 然れごも又まれまれには、新なる説のよきを聞きては、ふるきが悪
しきこゝをささりて、すみやかに改めしたがふたぐひも、なきにはあらず。

ふるきをいかにぞや思ひて、かくはあらしかきまでは思ひよれども、みづ
か、定むる力なくて、疑はしながらさてあるなごば、新なるよき説を聞き
ては、かくてこそは、いみじくよろこびつつ、たちまちにしたがふたぐ
ひも有りかし。
(玉勝間二の巻、あらたにいひ出でたる説)

【七三〇】 人はこそ萩の下葉もかつちりて嵐は寒し秋の山ざき、はもじを重ね
たる、いにしへの歌をも見て、ふきをかしきふしにおほねたるまゝに、
われもいかでこよみ出でたるなり。きこねてやあらむ、聞えずやあらむ、
われは聞ねたりと思ふこも、人の見たらむには、いかゞあらん、きこねず
やあらむ、しらすかし。
(玉かつま八の巻、萩の下葉八)

【七三一】 しづかに思へば、よろづ過ぎにし方のこひしさのみぞせむ方なき。
人しつまりて後、長き夜のすさびに、何まなき具足こりした、め、残しか
かじこ思ふ反古なごやりすつる中に、亡き人の手習ひ、繪かきすさびたる
見出でたるこそ、たゞその折の心地すれ。この頃ある人の文だに、久しく
なりて、いかなる折、いつの年なりけむと思ふは、あはれなるぞかし。手

慣れし具足なごも、心もなくかはらず久しきいごかなし。(徒然草二九段)

か
な

【七三二】 悲しいかな、昨日は紫宸北極の高きに位して、百司禮儀の妝をつく
ろひしに、今は白屋東夷の卑しきに下らせ給ひて、萬卒守禦の厳しきに御
心を惱まされ、時移り事去り、樂盡きて悲來る。天上の五衰人間の一炊、
たゞ夢かこのみぞ覺ねたる。遠からぬ雲の上の御すまひ、いつしか思召し
出す御事多き折節、時雨の音一通り軒端の月に過ぎけるを聞召して、
住みなれぬ板屋の軒の村時雨

音を聞くにも袖はぬれけり。

(太平記、卷三、主上笠置を御没落の事)

【七三三】 少將はもこの如く院に參らせ給ひて、宰相の中將まで上り給ふ。康
頼入道は東山雙林寺にわが山莊のありければ、それに落ち著きてまづかく
ぞつづけける。

ふるさこの軒の板間に苦むして

おもひしほぎは洩らぬ月かな

やがてそこに籠居して憂かりし昔を思ひやり、寶物集といふ物語を書きけりこそ聞ぬし。

(平家物語、卷三、少將都還)

【七三四】

秋來ぬま目に見ぬ空はむのづから、音かへて吹く風の袖も涼しき夕まぐれ、靡く稻葉の色までも千年の秋の始かな。

(謠曲、東方朔)

が
な

【七三五】

文貞公あづまのかたへおもむきはべりける時、おなじやうにくだりける人々、道にてあまたうせはべりけるよし傳へ聞きてよめる、

妙光寺内大臣母

めぐりあふ契ならずばなか／＼に

うきを見はてぬ命もがな。

(新葉和歌集)

【七三六】

おなじくばあかぬ心にまかせつゝ

ちらさで花を見るよしもかな。

(伊達政宗)

か
も

【七三七】

山川も依りて仕ふる神ながら

籠つ河内に船出せずかも。

(万葉集、柿本人麿)

す
は

【七三八】

松の嵐は琴のしらべ、鳴神のおこは鼓のひびき、よに心地よきゆふべやこ、佩きつる太刀の緒うちこけて、歌ひつ舞ひつ興も夜も、いさ闌なるをりしもあれ、四面におこる関の聲、すは夜討ぞこいぬせもあへず、雨よりしけき寄手の槍先、嵐はけしきかたきの太刀風。

(中村秋香、新體詩桶狭ノ一節)

す
は
や

【七三九】

義光は二の木戸の高櫓にのほり、遙に見送り奉り、宮の御後影の幽

に隔らせ給ひぬるを見て、今はかうも思ひければ、櫓のさまの板を切り落し、身をあらはして、大音聲をあけて名のりけるは、天照太御神の御子孫、神武天皇より九十五代の帝、後醍醐天皇第二の皇子一品兵部卿親王尊仁、逆臣のために亡され、恨を泉下に報ぜんために、只今自害するありさま見置きて、汝等が武運忽に盡きて、腹を切らむとする時の手本にせよといふまゝに、鎧を脱ぎて櫓より下へ投げおとし、鎧の鎧直垂の袴ばかりに、練貫の二小袖を押肌脱ぎて、白く清けなる膚に刀をつき立て、左の脇より右のそば腹まで一文字に掻き切りて、腸つかみて櫓板になけつ、太刀を口にくはへてうつぶしになりてぞ伏したりける。大手搦手の寄手是を見て、すはや大塔宮の御自害あるは、我先に御首を賜はらむにて、四方の圍を解きて一所に集る。其の間に宮は引違へて、天の河へぞ落ちさせ給ひける。

(太平記、卷七、吉野城軍)

な

【七四〇】 花山寺におはしましたつきて、御ぐしかろさせ給ひてのちにぞ、粟田

殿はまかりいで、おきにも、かはらぬすがた、今一度みね、かくも、あんないも申して、かならず、まるり侍らむも、申し給ひければ、われをば、はかるなりけりてこそ、なかせ給ひけれ。あはれにかなしきことなりな。ひごろ、かく、御弟子にてさふらはむも、ちぎりすかし申し給ひけむが、おそろしさよ。東三條殿は、もし、さる事やし給ふも、あやふさにさるべくおきなしき人々、何がし、かゞしきいみじき源氏の武者たちをこそ、御おくりこそへられたりけれ。京のほごはかくれて、つゝみの渡りよりぞうちいでまるりける。寺なごにては、もしおして人なごやなし奉るさて、一尺許のかたなごもをぬきかけて、まもり申しけるごぞ。

(大鏡 王代記、花山院の條續き)

も

【七四一】 あし引の山ほごもぎす里なれて

たそかれ時に名のりすらしも、

(拾遺和歌集、雜、春)

【七四二】 朝びらき漕ぎでて來れば武庫の浦の

潮干の瀉に鶴が聲すも。

(萬葉集 十五)

【七四三】 熊谷涙をはらく、流して、あれ御覽候へ、いかにもして助け參らせ候はじ。あはれ同じうは、直實が手にかけ奉つて、後の御孝養をも仕り候はんこ申しければ、只何様にも疾うく首を取れぞ宣ひける。熊谷餘にいこほしくて、何處に刀を立つべしこも覺ゆず。目もくれ心も消の果て、前後不覺に覺ゆけれも、さてしもあるべき事ならねば、泣く泣く首を掻きてける。あはれ弓矢取る身ほご、口惜しかりけるこはなし。武藝の家に生れずば、何しに唯今か、る憂き目をば見るべき。情けなうも討ち奉つたるものかなこ、袖を顔に押しあて、さめぐこぞ泣き居たる。首を包まんきて、鎧直垂を解いて見ければ、錦の袋に入れられたりける笛をぞ、腰にさゝれたる、あないこほし、この曉、城の内にて、管絃し給ひつるは此の人々にておはしけり。當時味方に東國の勢何万騎あるらめごも、軍の陣に笛もつ人はよもあらず。上臈は猶もやさしかりけるものをこ

て、是を取つて、大將軍の御見參に入れたりければ、見る人涙を流しけり。

(平家物語、敦盛最後)

や

【七四四】 秋は又夕暮の景色こそたゞならず見ゆれ。薄霧の籬に立ちのほるよそほひ、風の音、虫の音、いづれもなく人の心に沁みて、春にも優りあはれ深し。「秋は夕。」と誰か言はざるべきや。夜長ければ、曉の鐘人を驚し易く、寢覺勝なり。こゝさら老のねぶりは早く覺めて、常に夜を残せばいのねられぬまゝに、懐古の心残夜に生じて、來し方行く末の事思ひ續けらる。老いては常に昔の事のみぞ忍ばしき。

(樂訓卷中)

【七四五】 互にいはむほごのこをば、けに聞かひあるものから、聊か遠ふこころもあらむ人こそ、「われはさやは思ふ。」なき、争ひにくみ、「さるからさぞ」こも、うち語らは、つれなく慰まめ思へぎ、けには少しかこつ方も、われも等しからざらむ人は、大かたのよしなしごいはむは

ここそあらめ、まめやかなる心の友には、遙に隔りたるこころのありぬへ
きぞわびしきや。
(徒然草一二段)

【七四六】 天たちまちくつがへり、地見る見る裂け、きらめく稻妻光のひまに、
二千餘人の玉の緒は、草葉のつゆみ消にけり。あゝさだめなき人の世や、
たのまれぬ人の身や。さもいかめしく轟きし、名はたゞ夜半のはた、神、
夢の名残の松風も、昔のあこや尋ぬらむ、さみだれさむき桶狭。
(中村秋香、新體詩、桶狭の一節)

【七四七】 關路花を
宮内卿

あふさかや、木末の花をふくからに
あらしぞかすむせきの杉むら。
(新古今集、春下)

【七四八】 限々に残る寒さや、梅の花。
(蕪村)

や
も

【七四八】 山はさけ海はあせなむ世なりとも

君に二心われあらめやも。
(鎌倉右大臣集)

よ

【七四九】 心のほかなるここありて、知らぬ國に侍りける時よめる。

さつまがた沖の小嶋にわれありき

おやには告げよ、八重のしほ風。
(千載集、平康頼)

【七五〇】 庭上に充ち満ちたる兵どもこれを見奉りて あはれこの殿は大剛の
人かな。さんぬる十日より、多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の
座上に著く人一人もおはしまさざりつるに、仕出したるここよ。門を入り
給ふよりいさゝかも臆したる體も見ね給はず。あはれこの人を大將として
合戦せば、いかばかり頼もしからむし申しあへりけり。
(平治物語、光頼参内の條)

を

【七五二】 やくも立つ出雲八重垣妻こめに

八重垣つくるその八重垣を。

(古事記上)

を や

【七五二】

但し・皇國の人に對しては、さあらむもから人めきてよかんめれき。もし漢國人の問ひたらむには、「我はそなたの國の事はよく知れれども、わが國の事は知らず。」こは、さすがにわいひたらじをや。若しさもいひたらむには、「已が國の事をだにわ知らぬ儒者の、いかでか人の國の事をば知るべき。」さて、手をうちていたくわらひつべし。

(玉勝間一の卷、皇國の事をば知らぬ儒者)

第十類 接尾語篇

が て

【七五三】

鶯の待ちがてにせし梅が花

散らすありじそ思ふこがため。

(萬葉集五)

七五四】

夜やくらき路やまぎへる時島

わが爲をしも過ぎがてにく。

(古今集、夏)

【七五五】

神名月時雨ばかりは降らずして

雪がてにさへなごかなるらむ。

(後撰集、名)

【七五六】

雪がてに吹く春風は早けれき

青山なれば寒からなくに。

(夫木集一)

が てら

【七五七】

あはれうち滅されけるつはもの心よ、佛のいふらん妄執ごもなり

ぬべし。君おもひの誠、今は空しき看做したりけむ三成が心、さばかりも思ひ遣られていさこそいたましけれ。さるをこの主の心の程をも思ひ知らず、姦臣ぞなきあしざまにいひなすらんは、いさも心うき事なり。それも徳川の世の程こそあらめ、今誰に諛ひてのあけつらひさかせん。今日こゝに來りて思ひ出づるまゝに、弔ひがてらさぞ。
(飯田武郷・蓬室集)

【七五八】 我やまの花見がてらにくる人は

ちりなん後ぞこひしかるべき。

(古今和歌集、春、上)

がはし

【七五九】 文治元年九月の末に、かの寂光院へ入らせおはします。道すがらも四方の梢の色々なるを御覽じすぐさせ給ふ程に、山陰なればにや、日もやうくくれかゝりぬ。野寺の鐘の入相の聲すごく、分くる草葉のつゆしけみ、いさゞ御袖ぬれまさり、嵐はけしく木の葉みだりがはし。空かきくもりいつしか打しくれつゝ、鹿の音かすかに音づれて、虫の怨もたねくゝなり。

(平家物語)

から

【七六〇】 およそ、四の時の推し移る折々につきて、感を起す人は情深し。愁人はこれによりて悲み、達士はこれによりて樂む。景氣は同じけれど、唯見る人から、艶にも優くもおもほゆるなるべし。
(樂訓卷中)

からに

【七六一】 浮きて行く紅葉の色の濃きからに。

川さへ深く見わたるかな。

(紀貫之集)

げ

【七六二】 秋たちてまだ幾日もあらぬほごは、大かたのけしき、あつかはしさなごも夏にかはらねば、やくきは扇打ならしつゝ、むかし人のいづれがさ

きにごほつかなかりし草むらのつゆも、けにいかならんご思ひて、ねぶ
たきを念じて、法の師のあかつきかきしたらんやうに、いごころおき出で
て見れば、我こそさきにごぼりがほにおきわたして、きらくご見ゆる光
いごすゞしけなり。まして朝けの風の額にかよいたるはいはんかたなし。

(藤井高尚)

【七六三】 十月つごもりがたに、あからさまに来て見れば、木暗う茂れりし木
の葉ごも残りなく散り亂れて、いみじくあはれけに見わたりて、心地よ
けにさゝらぎ、洗れし水も木のはにうづもれてごあばかり見ゆ。

(さらしな日記)

【七六四】 蓮のうき葉のらったけにて、のごかにすめる池のおもてに、大きな
るご小さきご、ひろごりてたゞよひてありく、いごをかし、ごりあけて、
物おしつけなごして見るも、よにいみじうをかし。(枕草紙、三十三段)

さ

【七六五】 晝のまは暑さ堪へがたくて、はかしくしうもねあゆまねば、朝影の

程にこそはきて、鳥の聲ごごもに起きいでて行くに、有明の月くまなく澄
みわたり、竝木の松風涼しく吹き通りて、ほろくごこほるゝ露の袂にか
かれるもいごこゝちよし。道のかたへなる田の面に、人の音をひのするを、
何かご見れば、車の上に登りて、水踏み入るゝなりけり。吾が旅のうさ
も聊かなぐさみぬ。

(標園文集、第二卷、夏の旅)

すがら

【七六六】 路すがら心も空にながめやる

都の山の雲隠れぬる。

(千載和歌集、八)

【七六七】

小忌衣摺りすて着つる露けさは

春の日すがらまたぞ忘れぬ。

(藤原公任集)

だち

【七六八】 笈の水の気色、はかなき木草までも見所あり。廣き野にわれもか

をまじのものなく植ゑわたしたるに、若き女房だち山際まで分け入りて見れど、道なくて歸りぬ。

(中務内侍日記)

どち

【七六九】

八九月にもなりぬれば、木々のこの葉も枝にこまらず、虫のこゑもゑもの思ひ知り顔に荻ふく風の音もそゞろさむく、たびねのかりの便なけなる聲も耳にこまりて、奥山の鹿もいさゝいやめに思ひやられ、よろづあはれに心ほそき夕ぐれ、皇太后宮の女房たち、はしを打ながめておのがさちうち語らふ。

【七七〇】

おこななる子供あまた、ようせずば、うまごなごもはひありきぬべき人のおやぎちのひろねしたる。かたはらなる子ぎもの心地にも、親のひろねしたるは、より所なくすさまじくぞありし。

(枕草紙十四段)

ながら

【七七二】

かつあらはるゝをも顧みず、口にまかせていひちらすは、やがてう

きたるこゝに聞ゆ。又われもまこしからずは思ひながら、人のいひしままに、鼻のほこ、をこめていふは、その人のそらごこにはあらず。けにけにしく、まころくうちおほめき、よく知らぬ由して、さりながらつましく合せて語るそらごこは、おそろしきここなり。わがため面目あるやうにいはいれぬるそらごこは、人いたくあらがはず。皆人の興するそらごこは、獨さもなかりしものをいはいはむも、せむなくて聞きるたるほごに、證人にさへなされていこゝと定めぬべし。

(徒然草七三段)

【七七二】

よき人は、ひこへにすけるさまにも見えず、興するさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のもこにはねぢより立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み連歌して、はては大きな枝、心なく折り取りぬ。泉には手足さしひたして、雪にはかり立ち跡つげなご、よろづのもの、よそながら見るここなし。

(徒然草一三七段)

【七七三】

すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らで

も、月の夜は閨の中ながらも思へるこそ、いまたのもうしをかしけれ。

(徒然草一三七段)

【七七四】

露ならぬわが身と思へき秋のよを

かくこそあかせおきるながらに。

(後撰集、秋、中)

【七七五】

能因は いたれるすきものにてありければ、

都をばかすみこもに立ちしかき

あきかぜぞふく白川のせき

こよめるを都にありながら、この歌を出ださん事念なしと思ひて、人にもしられず、久しく籠もり居て、色をくろく日にあたりなして後、陸奥國の方へ修行の次によへたりこそ、披露し侍りける。

(古今著聞集、能因の歌の事)

な ど

【七七六】

五位の藏人もほそ殿に、人こあまたるて、ありくものきも身やすか

らずよびよせて、ものなごいふに、きよけなるをのこ、小舎人わらはなごの、よきつ、みぶくろに、きぬごもつ、みて、指貫のこしなごうち見わたる袋に入れたる、弓やたてほこたちなご、もてありくを、たがごこごふに、つる居て、何がし殿のこいひて、行くものはいこよし。(枕草紙、廿八段)

【七七七】

藤川に至りぬ。關屋の址は今さだかならず。右の方に松尾山、やはなれて左の方に天満山見ゆ。關が原のうまやに至れば、連れる山々、桃配、南宮山なご、木立深く茂れり。慶長の昔を思ひやればいご哀なり。いも去りやらず、しばしうちやすらひて、こなたかなた見めぐらすに、そのかみおほいて、何ごなくさしぐまるゝも悲し。

(飯田武郷、蓬室集)

【七七八】

みすまじき人に、外へやりたる文ごりたがへてもて行きたるねたし。けにあやまちてけりこはいはで、口かたうあらがひたる、人めをだにおもはずば、はしりもうちつべし。面白き萩薄なごをうゑてみる程に、ながびつもたる者、鋤なご引きさけて只掘りに掘りて、いぬるこごわびしう嫉かりけれ。よろしき人なごのある折は、さもせぬものを、いみじうせいすれ

さ。たすこしな。ひてぬる。ふかひなくねたし。

(枕草紙四十七段)

び

〔七七九〕 櫻花都ならぬ春くれば

色はひなびぬものにぞありける。

(躬恒集)

〔七八〇〕 世の常の山のたゞすまひ、水のながれ、目の近き人の家居有様、けにさ見ゆ、なつかしくやはらびたる形なごを、静にかきまぜて、すくよかならぬ山の氣色、木深く、世離れてたゞみなし、氣近き籬の内をば、そのこゝろしらひかきてなごをなむ、上手はいさ勢特に、わるものは及ばぬ所多かめる。

(源氏物語、帯木)

めかす

〔七八一〕 草の花は、撫子。唐のは更なり。やまごのも。いさめでたし。女郎

花。桔梗。菊のまこころくうつろひたる。かるかや。りんだうは、枝ざしなごも、むつかしけなれご。こご花みな霜がれはてたるに、いさ花やかなる色あひにて、さし出でたる、いさをかし。わざご取り立て、人めかすべきにもあらぬさまなれご。かまつかの花らうたけなり。名ぞうたてけなる。雁の來る花ごもじにはかきたる。かにひの花、色は濃からぬご、ふしの花にいさよく似て、春ご秋ご咲く、をかしけなり。(枕草紙 三十四段)

めく

〔七八二〕 わかき人ごちごは肥わたるよし。受領なごみなだちたる人は、太きいさよし。あまり瘦せからめきたるは、心いられたらんごみしはからる。

(枕草紙、二十八段)

〔七八三〕 人の家の前をわたるに、さぶらひめきたる男、つちに居るものなきして。をのこごの十ばかりなるが、髪をかしけなる引きはへても、さばき

てたるも、又五つ六つばかりなるが、髪は首のもこにかいくみ、つら
いこ赤う、ふくらかなる、あやしき弓、しもさざちたるものなご、さ、け
たる、いさうつくし。車なごごごめて、抱き入れまほしくこそあれ。

(枕草紙、二十八段)

ものから

【七八四】 この雨に木々も染めなんご思へば、「茸なごも生ひ出でなん、栗も
はや落つべし。」なご、わらはべの物寂しげに、ごもし炭に對ひつゝ言ひ
出づるも、けにさまぐなり。夜深き鐘の音の打ちしめるものから、流石
に秋は聲さにて聞ゆるにぞ、ふるごごまでも思ひ出でて、鐘撞く人の心を
も哀ご思ふばかり、感情はいさ深かりけり。

(花月草紙、雨)

【七八五】 ありたきごは、まごしき文の道・作文・和歌・管絃の道 また有職
に公事の方、人のかごみならむごそいみじかるべけれ。手なごつたなからず
走り書き、聲をかしくて拍子ごり、いたましようするものから、下戸ならぬ

ごそ男はよけれ。

(徒然草二段)

【七八六】 尾張の國熱田の宮に至りぬ。神垣のあたり際ければ、やがて参りて
拜み奉るに、木立年ふりたる杜の木の間より、夕日の影たぐさし入り
て、朱の玉垣色をかへたるに、木綿四手風に亂れたる事ながら、物にふれて
神さびたる中にも、ねぐら争ふ鶯群の、數も知らず梢に来るる様、雪の積
れるやうに見えて、遠く白きものから、暮れ行くまゝに、しづまり行く聲
々も心すごく聞ゆ。

(東關紀行、尾張路)

【七八七】 まつ人にあらぬものから初雁の

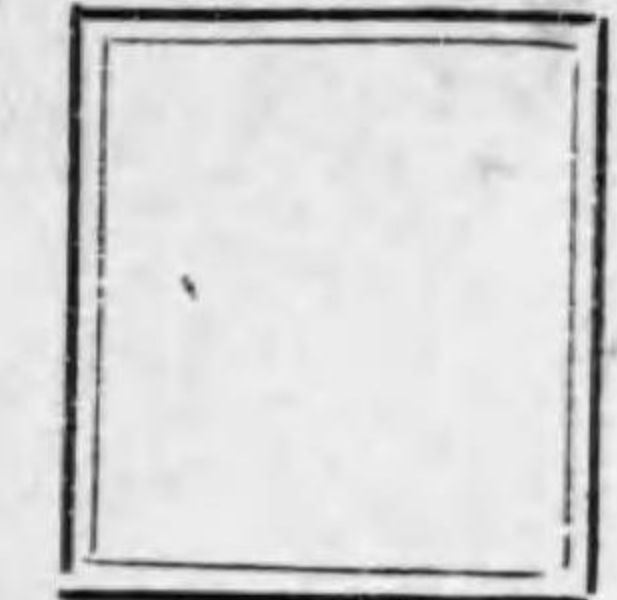
けさなく聲のめづらしきかな

(古今和歌集、秋、上)

334

大正十一年八月十日印刷
大正十一年八月十五日發行

著者



龜井常三
橫本美一
坂井俊翁
藤島為三
福利俊翁
毛島俊翁
日高利三
田中東三
郎光昌

東京芝區下高輪一七

印刷者 芳文館

東京芝區下高輪町一七

發行所 東京新進堂

振替大阪三三三六六番

定價壹圓六拾錢

506
231

終